



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

文字だけを読むんじゃない。
人間と世界を読むんだ。



2018

文学部 Faculty of
Humanities

① 深める

文字の向こう側に、 新しい世界を見るためには…

7学科、7人の声。

哲学科

(4年 飯塚 萌)

次々と生まれる問い。

ゼミと研究会：1年次からゼミがあり、文献に向き合う力や文献を吟味し、自分の考えを相手に分かりやすく伝える力を身につけていきます。授業以外にも、大学院生・学部生による自主的な研究会が活発に開催されており、個人の関心をより深められます。

卒論に向けて：必修科目である古代・中世・近世哲学史の講義は、卒論のテーマを決める上でとくに役立ちました。卒論ではハイデガーらの原典を読み、解釈学の観点から「人間とは何か」という大きな問いに挑戦しますが、大学院へ進学して、さらに研究を深めていきたいと思っています。

【研究会】：さまざまな研究テーマに応じ、20以上の研究会が存在し、学内の教員、学生だけでなく、OB、他大学の教員、学生など自由に参加可能。



史学科

(3年 鶴岡 己海規)

一度立ち止まり、ものごとを批判的に見る。

卒論に向けて：さまざまな授業を受けることで関心が広がりましたが、卒論に向けて、公家や武家の日記を読み解き、中世における天皇権力のあり方について研究しています。先生やゼミ仲間から得られるアドバイスは、研究を進める上でとても役立っています。また、先生の研究室をふらっと訪れ、研究の悩みなどを話せる環境は、史学科ならではのですね。

進学：大学院進学も視野に、これからもシンポジウムや研究会にも積極的に参加していこうと思います。

【ゼミ(演習)】：専門としたい時代、地域に応じて選択。複数のゼミに所属する場合もある。



国文学科

(3年 渡邊 千紘)

日本だけで完結しない、日本文学の広がりと深さ。

学科での学び：1年次にくずし字の読み方や**工具書**の使い方など、国文学を学ぶ上で必要な知識を学びました。2年次から始まった演習の授業では、ほかの学生の鋭い考察や意見を聞くことができ、とくに刺激的です。9月から1年間、オーストラリアに留学しますが、表現力や発信力を磨き、国文学での学びにも生かしていきたいです。

卒論に向けて：どのようなテーマで卒論を書くか迷っていますが、東北と関わりのある中世の作品を取り上げ、出身地について見つめ直してみようとも考えています。

【工具書】：漢籍など原典を読む際、また先行研究の手引きとなる辞書、目録。



英文学科 (3年 阿部 のどか)

グローバルとは国際化ではなく、多様性。

きっかけ：高校生の時から日本での英語教育に興味をもち、より良い教育を実現したいと英語教師に憧れていました。1、2年次には英文学の基礎を学び、今は言語学の**セミナー**に所属し、学ぶ側に寄り添った英語教育の実践方法を研究しています。

卒論に向けて：中高の先生方による勉強会にも参加し、積極的に意見交換をしています。夏から留学するアメリカでも、理論ばかりを学ぶのではなく教育現場を見学することで、帰国後の教育実習や卒論にも生かしていきたいです。

【セミナー（演習）】興味に応じ、複数のセミナーを履修可能。



ドイツ文学科 (4年 松原 俊介)

文学から世の中を見つめ直す。

生きたドイツ語：ドイツ文学科の授業だけでなく、他学科の授業やドイツ人学生との**タンデム**を通じ、ドイツの歴史や政治についても学んでいます。3年次には入学時からの目標であったドイツに留学し、プレゼンのテーマとして児童文学作家であるケストナーを選びました。帰国後もネイティブの先生の授業に積極的に参加し、生きたドイツ語とふれあう機会を大切にしています。

卒論に向けて：卒論ではケストナーの作品を分析し、なぜナチ時代に自身の作品が焚書されてもドイツを脱出しなかったのか、ドイツ語でまとめる予定です。

【タンデム】：一対一で母語・外国語の語学学習をすること。



フランス文学科 (4年 吉野 光波)

過去と今、生きている私たちとの共通性を見出す。

きっかけ：フランス人の知人とフランス語で話したいと、独学で勉強を始めたことをきっかけに、フランス文学科に進学しました。

卒論に向けて：3年次の**文献演習**で扱ったカミュの作品を題材に、人間の二面性について考察するつもりです。卒論を指導してくださる先生との個人指導は、独りよがりな解釈になることを避け、新たな構想や視点を見つけられる絶好の機会です。卒論に生かすべく、院生を中心に立ち上げられた読書会にも参加し、原語で哲学的な文献を読むことにも挑戦しています。

【文献演習】：フランス語の文献を熟読し、文学史的な位置づけや分析方法を学ぶ。



新聞学科 (3年 長谷川 美波)

理論と実践で養われる社会を見抜く力。

学科での学び：講義だけでなく、テレビ制作や**インターン**などを通じ、専門分野への学びを深められることは、新聞学科ならではの学びです。昨年のゼミ論文では、「日本のテレビにおける国際ニュースの特質」として、テレビ報道を分析しました。

海外へ：グローバル教育センターによる**GCP**のうちグローバル・メディアコースを受講し、海外メディアの知識や海外から見た日本のメディアについても学んでいます。9月から1年間、文科省による「トビタテ！留学JAPAN」の第7期生としてアメリカに留学し、ジャーナリズムを専攻する予定です。

【インターン】：企業で一定期間、実践的な職業経験を積むこと。

【GCP（グローバル・コンピテンシー・プログラム）】：本学の教育理念である「他者のために、他者とともに」を体現する社会のリーダーを輩出することを目的とした実践的、実務的な教養教育プログラム。



② 広げる

学科の壁を超えて、 人文学の広さと深さを。

横断型人文学プログラム

横断型人文学プログラム（IHP*）は、学科の専門の枠を超えて、今まで考えてもみなかったつながりを発見する、そんな創造的な学びの機会を提供する新しいプログラムです。

そこには3つのコース、「身体・スポーツ文化論」「芸術文化論」「ジャパノロジー」が用意されており、それぞれ指定された科目があり、各自が興味をもった分野を選択し、知識を深めてゆくことができます。

プログラムを修了すると「プログラム修了認定証」が授与されます。

*IHP：Interdepartmental Humanities Program

2017年秋、開講

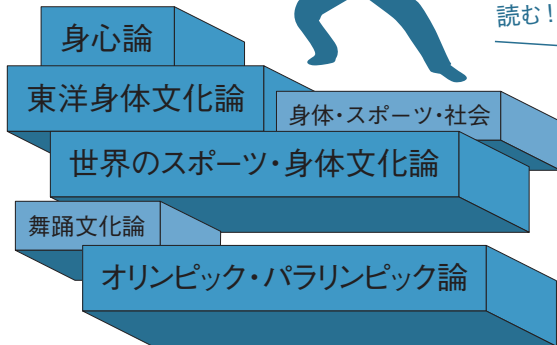
*プロジェクト・ゼミ

学生の興味にあわせて作りあげるクラスです。研究テーマを定め、複数の学科の学生が協力してリサーチ、分析、場合によってはフィールドワークを行うなどして、最終的にプレゼンテーションへつなげていき、研究成果の発表会も行う予定です。

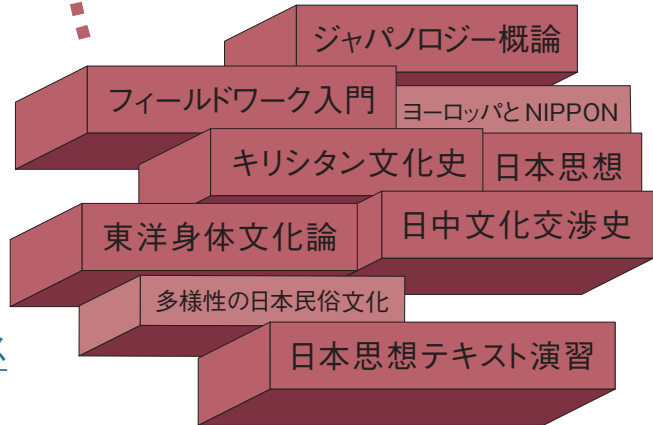
プロジェクト・ゼミ

知らない
『日本』に
逢いにいこう！

文化としての
身体を
読む！



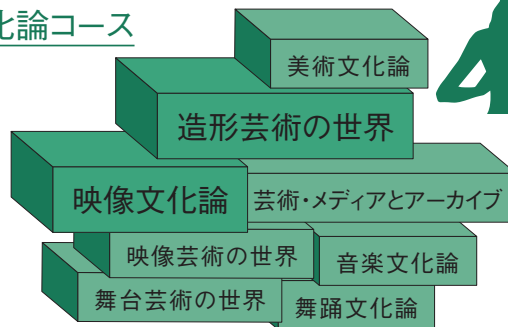
身体・スポーツ文化論コース



ジャパノロジー・コース

3つのコース

芸術文化論コース



深く知るほど
感動も
深くなる！

*テキストを読む

文字に限らない広義のテキストの概念、たとえば遺跡や遺物、美術品、映像作品、メディア、身体、社会風潮など、それぞれの読み方を学び、各々の特性を理解した上で、それらを批判的に読む視点を養います。

テキストを読む

文化交渉入門

*文化交渉入門

外来文化の受容や自国文化の発信の際に生じる文化変容について、歴史的事実や現代の事例、たとえば翻訳や、美術・音楽・演劇・スポーツのプロモーションの際に生じる現象などを考察し、文化現象を相対的に見る視点を養います。

詳しくは文学部オリジナルサイトへ。www.sophia-humanities.jp/